

2019年、夏期海外研修の報告

——マカオ、ベルリン、ローレンでの研究活動を終えて——

ヒンターエーダー＝エムデ・フランツ

2019年7月末から9月にかけて、中国特別行政区マカオでの国際比較文学大会（ICLA）、ドイツ、ベルリン自由大学での研究打ち合わせ、スイス、ローレン翻訳センターでの科研プロジェクト研究会に参加してきました。研究成果を発表するとともに、来年度、再来年度の共同研究の計画についても、細部を詰めてくることができました。以下では、その詳細について、ご報告したいと思います。

夏休みは唯一まとまった研究時間を取れる時期で、今年はこれをフルに海外での研究活動のために使うことにしました。ヨーロッパでの研究活動は、近年飛行時間が短縮されたとはいえ、12～14時間のフライトを含め、出発地から目的地まで20時間以上の移動時間が必要で、年々、体力的にもきつく感じるようになってきました。そこで、今回はスケジュールを調整して、学会発表だけでは終わらせず、研究打ち合わせや研究会もまとめて行いました。長期間の出張となり、関係する皆様方にご迷惑をおかけしてしまったことが心苦しくはありますが、おかげさまで非常に有意義な海外出張になり、無事に戻ってくることができました。

ICLA大会は3年ごとに行われ、世界中から比較文学研究者が集まります。私は過去、2010年のソウル大会、2013年のパリ大会と参加し、そして2016年のウィーン大会では科研プロジェクトの一環として初めて自らワークショップを実施する経験もしました。そして今年、2019年の大会は、当初は中国の深圳市で行われる予定でしたが、開催まで一年半という頃になって、急遽、会場が中国本土からマカオに変更されました。マカオは皆様ご存知の通り、かつてはポルトガルの植民地だった中国特別行政区の都市です。大会は、総合テーマに関わる個人研究発表、研究グループが開催するワークショップ、講演会やパネルディスカッション、そして遠足や演劇などの文化プログラムから構成され、発表言語は英語、フランス語および開催地言語（今回は中国語）です。ちなみに私は「Roundtable R3: Literary, Cultural, and Temporal (Un)Translatability」と「Workshop: W30 Typologizing the Dream / Le rêve du point de vue typologique」の2つのセッションで、計2本の研究発表を行いました。大会の規模は大きく、参加者は2千人超、発表者だけでも千人を超えます。事前にしっかりプログラムに目を通し、自分の研究に関連する発表やイベントに集中的に参加すれば、あらたな研究材料を得たり、優れた研究者と出会うこともでき、視野、人脈を広げる可能性に満ちた学会です。ただ今回は、採点業務などと平並して直前まで準備が終わらず、まったくもって余裕がありませんでした。その上、開催中には、マカオは台風に見舞われました。私が二本目の発表を終えてまもなく、セッションの最後の発表中に、主催者側から台風接近のためマカオ大学からできるだけ早く避難するようとの指示が出されました。幸い大きな被害には至りませんでした。午後の発表はすべて中止となってしまいました。

そのような状況下、私が2本の発表を無事に実施できたことは幸運でした。1本目の発表は、エアランゲン大学時代の恩師のエンゲル教授の「ドリーム・ワークショップ」の枠組みで行ったものです。これは教授が長年にわたり継続して行っている「文学における夢」に関わる研究プロジェクトです。心理学的なアプローチではなく、文学独自の夢描写、表現、または語りからアプローチする研究を行

っています。欧米文学が中心ですが、中国や日本などのアジア文学も紹介してほしいということでパリ大会では夏目漱石の「夢」について話し、昨年ドイツで行われたシンポジウムでは、先生からの依頼で夢幻能における「夢」の演出を紹介しました。今回も再び夢幻能の研究をしたいと伝えたのですが、違うテーマがいいと先生に助言されました。研究仲間のアドバイスもあり、上田秋成の『雨月物語』に取り組んでみようと考えました。この作品は溝口健二監督によって映画化もされており、文学と映画という異なるジャンルにおいても論じることが可能です。そこで発表は「Ghost Dreams: "Tales of Moonlight and Rain" by Ueda Akinari (1776) and Kenji Mizoguchi (1953)」と題して『雨月物語』を一種の夢物語として読んでみました。

二本目の発表は、現在取り組んでいる研究プロジェクト「ジャンルの混交と共感覚 - 20世紀モデルネの文学、絵画の新たな受容」に関連して「共感的なナレーション ローベルト・ヴァルザーの言語をめぐる実験」と題しました。このプロジェクトでは、作家ローベルト・ヴァルザーと画家パウル・クレーという二人のスイス人を中心に「共感覚」の観点から研究を進めています。絵画における写実主義からの離脱のパラダイムシフトが、印象派を始め100年以上も前に起こったことには、ジャンルを超えた広範なコンセンサスがあると私は考えています。ただ、近代文学においては、絵画以上に作家個人のスタイルが変幻自在であるため、パラダイムシフトを正確に把握することは今もって困難な場合が少なくありません。読み手の理解をすり抜けていくヴァルザー文学などは、まさにその典型例といえるでしょう。

私はこれまでヴァルザー文学に多面的に取り組んできました。和訳のプロジェクトに始まり、「高尚と通俗」の視点、ジャンルの混合、ハイブリット性など、様々な角度からアプローチしていますが、ヴァルザーの作風は奥が深く、容易には片が付きません。そのような試行錯誤の中で、ある意味では共感的な語り方も「夢」の語りに似ている面があることに気づきました。つまりは、常識的な言葉づかいの彼岸で試みられている、何かを表現しようとする試みなのです。言葉の選び方や文体などによって、著者が言語の多様な作用をどのように引き出しているかについて、今回は重点的に調べてみました。ヴァルザーの物語は内容レベル以外に様々な形で言語の多元性を生かしています。ヴァルザーの自由奔放な語りは近年注目を集めるようになってきましたが、言語の隠れた可能性を引き出すこのヴァルザーの表現法には、共感的な要素が深く関係していると、私は想定しているのです。

以上、紹介した両方の発表がどのようにつながっているのか、と聞かれると簡単には答えられないのですが、私は夢、感覚や共感覚を「物語」の観点から研究したいと考えています。物語は古来より、人間が生死、好悪、時空など理解不可能なことに取り組む一つの方法であり、人間世界を理解する為の一種の調べとってよいものです。比較文学や翻訳を含めて文学は、人間存在への理解を深める一つの鍵であると思っています。

学会後、マカオから香港経由でドイツに移動しました。香港空港は度々混乱が生じ、封鎖されることもありましたが、幸い、帰路も無事に乗り換えることができました。残念なことに中国側と妥協できる平和的解決は未だに遠いようですが、交渉による妥協を祈るばかりです。

ドイツでは、休暇を挟んで里帰りもできました。研究の次の目的地はベルリンでした。2020年7月末にイタリアのパレルモで開催するIVG大会（ゲルマン言語学・文学国際協会）でのワークショップ準備のためにベルリン自由大学での研究打ち合わせに参加しました。共感覚への理解を深めるために絵画も視野にいれ、ベルリンの美術館巡りを楽しみました。「現代美術館ハンブルク駅」に足を運んだのは初めてでした。展覧会「エミール・ノルデ 一つのドイツの伝説。国粋社会主義における芸術家」が開催されており、退廃芸術家とされながら、反ユダヤ主義信奉者でナチス支持者であったエミ

ール・ノルデの作品を見ることができました。戦後には彼のナチ崇拝の側面は忘れ去られ、ドイツ戦後文学の名作、『国語の時間』のモデルにもなった多様な顔を持つ画家です。来館者は、鮮やかな色彩や鬼気に溢れる自然界の絵に思わず圧倒されます。しかしノルデの手紙などを目にとると、誰もがその陶酔から醒めてしまいます。

そしてマルティン・グロピウスパウ美術館では現代アーティスト達が作っている「現世快樂の園」の展覧会を訪れました。ヒエロニムス・ボスの有名な『快樂の園』という超現実かつ幻想的なヴィジョンを題材にした、興味深い「共感覚」そのものの展覧会でありました。草間彌生も含めて、さまざまなメディアや表現方法を使うアーティストが、「ガーデニング」というテーマでそれぞれ一つの部屋をまるごと造形しました。特に印象に残ったのは、割れた緑色のガラス瓶からなる「芝生」でした。この作品を見る瞬間に思わず「痛み」、「血」、「赤」、「ケガ」、「危ない」、「叫び」の様な連想が起こり、まさに共感的な体験を引き起こす作品です。南アフリカの若い芸術家Lungiswa Gqunntaは、私たちがイメージする癒やしの庭が、植民地を背景にその庭を世話をする人たちにとって暴力、負傷や搾取の空間にもなり得るというメッセージの作品を作りました。

世界遺産のムゼウムズインゼル（博物館島）にある旧国立美術館を再度訪問し、ロマン派のC. D. フリードリヒなどの作品を久々に鑑賞しました。マカオでの発表に向けて、セザンヌを主題としたヴァルザーの作品『セザンヌ思考』（1929年）やメルロ・ポンティの論文『セザンヌの疑惑』（1945）と『眼と精神』（1960）を読んでいたので、ベルリンでセザンヌの絵画を目にしたときは特に感銘を受けました。共感覚の視点から一層、絵画と文学の関連について考えさせられました。

最後にスイスのチューリヒ郊外にある「ローレン翻訳センター」において、研究プロジェクトメンバー6人による研究会を開き、現在取り組んでいるテーマの中間報告を行い、今後のプロジェクトの進め方について議論しました。「ローレン翻訳センター」というのは、翻訳者が中・短期滞在して文学作品の翻訳作業を集中して進めていくことができる場所で、いくつかの個室に加え、図書館や催し物のためのホールなども付いている文化施設です。

また、スイス滞在中には、ヴァルザーの生地ビールの駅前広場で開催されていた、アーティスト、トーマス・ヒルシュホルンによるパブリック・アート「ローベルト・ヴァルザー・スカulptチャー」を訪れました。本来は生誕150周年を記念して2018年予定されていたものですが、予算折衝、タクシー業界との交渉などが難航し、2019年に開催がずれ込んだ企画です。世界中から、数々の作家、研究者、アーティストなどが集まり、約3ヶ月間に渡ってヴァルザー作品の多言語による朗読、ヴァルザー文学との出会いをめぐる講演などが続けられた壮大なヴァルザー祭りです。このほかにもベルン市にあるローベルト・ヴァルザー・センターやパウル・クレー・センターも訪問しました。こうした機会に、研究グループでの議論、何人もの専門家との出会いから受けた数々の刺激を、これからの研究に生かしていきたいと思えます。本当に刺激に富んだ、収穫の多い海外研修となりました。

最後になりますが、研修準備に際してサポートくださった事務の方々、代理を務めて下さった同僚たちにお礼を申し上げます。また、マカオでの発表原稿を丁寧にチェックして下さったのみならず、発表の内容についても時間を惜しまず議論をしてくださったジョン・フィリップス先生に、この場を借りて、心より感謝の意を表したいと思えます。どうもありがとうございました。